

令和2年度 文部科学省委託
「幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究
(特別な配慮を必要とする幼児への指導の充実に関する調査研究)」

<研究テーマ>

幼稚園における指導上の配慮等に関する研究（外国籍等幼児）

現在、新宿区立幼稚園においては、1割以上の外国人幼児が在籍しています。その割合も近年増加傾向にあり、いわゆる外国につながる幼児（「外国籍等幼児」）を合わせれば、その割合はさらに大きくなります。国籍、在留国や母国の言語的・文化的背景、滞在期間、年齢、就園経験の有無、さらには家庭の教育方針も様々であることから、園での対応は困難になっています。

外国籍等幼児については、当該幼児が安心感をもち、次第に自己を發揮できるよう、また、自然に日本語や日本の生活習慣に触れることができるよう配慮するとともに、日本語習得までの期間も過ごしやすい環境を整えることが大切です。

そこで、一人一人の実態を的確に把握し、指導内容や指導方法の工夫を組織的かつ計画的に行うとともに、全教職員で共通理解を深め、幼児や保護者と関わる体制を整えていくことが必要であると考え、本研究に取り組みました。

研究は、次の4点を中心として進めてまいりました。

- 外国籍等幼児に対する保育・教育の在り方（指導内容・指導方法の工夫）
- ユニバーサル・デザインの視点に基づいた環境構成
- 組織的な体制の構築
- 幼児教育の多言語対応に向けた ICT 機器の活用

これらについて、外国籍等幼児や保護者への配慮としてだけでなく、共に過ごす幼児同士が、お互いを認め合う貴重な経験につながるとともに、障害のある幼児やその他すべての幼児が過ごしやすい環境を提供することにつながるという考えをもち、取り組んでまいりました。

本区の研究が、全国各園における運営の一助となりますと幸いです。



令和3年3月
新宿区教育委員会

【事例】 4歳児

「挨拶から重ねた関わり～母語での挨拶～」

○取組についての具体的な説明

A児は、日本語が全く分からず、毎朝登園時には、母親の後ろに隠れて緊張した様子が続いていました。

そこで、登園時に保育者が母語で挨拶することを繰り返し、見守り続けました。保育中も、日本語に母語や英語の単語を交え、指示をしたり遊びに誘い掛けたりするようにしていきました。

○外国籍等幼児や周囲の幼児の変容

1週間ほど経つと、A児は挨拶を母語で返すようになりまし。園生活にも慣れ始め、教師の言葉を聞いて繰り返し声に出すようになりまし。周囲の幼児も、A児に伝わる言葉を探りながらジェスチャーを交え、会話をすることが増えまし。

A児は、少しずつ表情が和らぎ、友達と一緒に同じことができた際には喜ぶ姿が見られるようになりまし。その姿を見て、他児も自分のことのように一緒に喜び、また、自分の言葉が伝わったことがうれしいと感じ、積極的に関わりをもつようになっていきました。
(.....: 教師の援助、.....: 本事例のポイント)

【ポイント】

- ・イラストや写真を入れたり、母語で表示したりする。(身支度、生活の流れ、物の置き場など)
- ・ジェスチャーを用いて説明する。

◎あいさつや気持ちを伝えるときは、簡単な母語の言葉を使う。(おはよう、おいしい、ありがとうなど)

- ・指示や日常会話はなるべく簡単な日本語を使い、一つ一つ短く伝える。
- ・様々な国の絵本を置き母語で絵本を楽しめるようにする。(母語の確立が、日本語のスムーズな習得につながるため)

【区】取組

- ・日本語初期指導 (母語による初期指導)
- ・全園へ双方向音声翻訳機の配布

☆事例・取組の詳細はP4へ

【ポイント】

- ・簡単なやり取りや動きのできる遊びを行う。(製作・動物の表現遊び・色探し遊び、鬼ごっこ、自然物を使った遊び、音楽を使ったふれあい遊び等)

◎友達がする遊びを当該園児も真似できる環境を構成する。(十分な数の教材や遊具など)

- ・見立てができる材料、少し手を加えるだけで作れる製作など主体的に楽しめる遊びの環境を用意する。
- ・洗濯や掃除など、生活に密着したごっこ遊びができるよう家電の遊び道具を作成しておく。

【区】取組

- ・全園へタブレット端末の配布

☆事例・取組の詳細はP5へ

☆タブレット端末の活用例は、P8へ

言語遊び

生活多様性

【区】取組

- ・園だより等、多言語での翻訳
- ・通訳派遣の制度
- ・入園説明資料プレゼンテーションの作成と各園への提供

☆事例・取組の詳細はP6へ

【区】取組

- ・区立図書館による外国の絵本や多言語に訳された日本の絵本の団体貸出
- ・図書館職員による外国語での絵本読み聞かせ

☆事例・取組の詳細はP7へ

【ポイント】

◎外国の文化に関する絵本や地球儀、用具、楽器等を置き、触れられるようにする。

- ・国旗や住居、食べ物など話題に取り上げ、知っていることを出し合い、異文化を知るきっかけにする。
- ・母国の食文化を大事にする。
(弁当の中身に配慮し、日本式を求め過ぎないようにする。園での調理会食の食材に配慮する。)
- ・日本の伝統的な行事や遊びに加え、様々な国や地域の行事や遊びにも触れる。(正月行事や遊び、お祭り等)

【事例】 3歳児

「遊びから始まるコミュニケーション～同じ遊び～」

○取組についての具体的な説明

入園当初には、日本語を発することのなかったC児は、D児と一緒にままごと遊びをしていました。

D児がぬいぐるみを布団で寝かせる動きをすると、C児もやりたそうにしました。それに気付いた教師は、同じようにぬいぐるみをあやせるように、「Cちゃんもやる」と尋ね布団を用意すると、C児は、D児と同じように人形を寝かしつけました。D児がミルクをあげる動作をするとC児も同じようにあげました。

○外国籍等幼児や周囲の幼児の変容

その後も、C児は友達と砂場でごちそうをつくったり、鈴を鳴らしたりし、同じ動きを楽しみました。

友達と同じ遊びを毎日繰り返すうちに、友達が「発車」と言うとC児も「発車」と言い、友達が「いちごジュース」と言うと「いちごジュース」と言いました。

心を許す友達の存在が言葉の獲得につながり、一緒に遊ぶ友達の豊かなイメージが、外国籍等幼児が遊ぶ楽しさにもつながりました。

(.....: 教師の援助、.....: 本事例のポイント)

外国籍等幼児をより理解し、安定した園生活を送れるようにするための援助・環境構成のポイント

【事例】 3歳児

「園生活にとけこむきっかけ～母語の手遊び～」

○取組についての具体的な説明

E児は、園生活の流れが分からないことから不安を感じており、泣いたり立ち尽くしたりしていました。

降園前にみんなが集まっても、不安から動けず、身支度もしないまま少し離れたところにいました。絵本や歌、紙芝居などに教師が誘い掛けても、あまり興味を示しませんでした。

そこで、教師がE児の母語で手遊びをして見せたところ、驚いた表情で教師の真似をし始めました。

○外国籍等幼児や周囲の幼児の変容

翌日、E児は友達を見て降園準備を済ませ、みんなと一緒に教師の近くに集まりました。その日もE児の母語で手遊びを行ったところ、笑顔で繰り返し楽しんでいました。降園時に保護者に様子を伝えると、前日にD児が「先生が〇〇語で歌ってくれた」と家で話したことを、保護者もうれしそうに話してくれました。

その後、D児は園生活の様々なことを、友達の様子を見ながら一緒に行うようになっていきました。手遊びが園生活に慣れるきっかけとなりました。

(.....: 教師の援助、.....: 本事例のポイント)

【ポイント】

- ・園生活に必要なことや生活の流れを視覚的な表示や具体物で示し、集団に参加しやすくする。
- ・保育者が一緒に行動する。
- ・同じ母語の幼児と一緒にグループにする。
- ・共通の楽しい経験を積み重ねていくことで、園生活に慣れていけるようにする。

◎教師が当該幼児の生活文化、習慣、遊びなどを学び、背景を理解して対応できるようにする。

- ・母国の生活習慣を大切にしつつ、日本の生活習慣を知らせ、受け入れてもらえるようにする。

【事例】 5歳児

「互いの国への興味～地球儀の活用～」

○取組についての具体的な説明

F児は、日本語での表現力や経験が少ないため、友達と会話を楽しんだり、互いの思いを受け止めて遊んだりすることが難しい様子がありました。時には友達とうまく関われない姿もありました。

ある日、みんなで集まる時間に、学級で地球儀を見ていたところ、世界で一番高い山の話になり、「世界で一番高い山は、富士山だ。」とロクに言う幼児らに、担任がエベレストを示し、「世界で一番高い山はE児の国の山だよ」と知らせました。

○外国籍等幼児や周囲の園児の変容

担任の話聞いて、周囲の園児は驚き、「すごいね！」とE児に話し掛けました。E児はうれしそうな表情を見せました。それをきっかけに、他の外国籍等幼児も地球儀を見て会話を弾ませました。

その後も、地球儀で他の外国籍等幼児の母国も話題に取り上げることで、互いの国への興味・関心が高まっていきました。

母国のことが話題になったり、「すごい」と感心されたりすることが、外国籍等幼児が友達とつながるきっかけとなり、仲間の中に自分の存在を感じることができるようになりました。

(.....: 教師の援助、.....: 本事例のポイント)

言語

「挨拶から重ねた関わり～母語での挨拶～」

A児は9月にバングラデシュより入園しました。入園以前も日本で生活をしていましたが、日本語は全く分からず、保護者は日常会話についてはおおむねできましたが、読み書きは分からないため、連絡事項は英語を織り交ぜて伝えるという状況でした。

A児は、登園の際は緊張して保護者の後ろに隠れていることが多く、教師が「おはようございます」と挨拶をしても、黙ってうつむいている様子が続いていました。保護者は「おはようございます」と日本語で挨拶を返し、A児に大きな声で「おはようございます」と言うように母語を交えて声を掛けますが表情は硬いままでした。

そこで、教師が「ナマステ」と母語で挨拶すると、A児のうつむいていた顔が少し上がりました。返事はありませんでしたが、反応があったため、毎朝日本語と母語で挨拶をすることを続けました。持ち物が揃わないと本児が不安になるため、毎日保護者にも英語と具体物や絵を交えながら丁寧に連絡するようにしました。

1週間ほどするとA児は少しずつ園の生活に慣れ、挨拶をするようになりました。まだ自分から言葉を発することはありませんでしたが、教師の言葉を繰り返して口に出すことが増えてきました。周囲の子ども、日本語が伝わらないことを気にとめず、積極的に声を掛けています。朝の身支度では、B児が、登園してきたA児に「A君、うわばきを履くんだよ」と言いながら靴箱のところまで連れていき、自分でやって見せていました。「シューズ」とA児がつぶやくと、B児は教師に「シューズって何」と聞きました。教師が「うわばきのことだよ」と説明すると、B児はA児に「そうそう、シューズ」と言いました。A児がうわばきを履き替えることができると、近くにいた子供たちは嬉しそうに「A君、イェーイ」と拍手をしました。その瞬間、A児の表情が和らぎました。

その後も、周囲の子供はジェスチャーを交えながらA児にすることを知らせ、支える姿が見られました。A児は気に掛けてくれるB児の名前を呼ぶことが増え、B児も何に困っているのかを察しながら、うれしそうに関わる姿が見られました。

1ヵ月もすると、友達が「先生、いってきます」と戸外に行く姿を見て、A児も「先生、いただきます（いってきます）」と真似て、戸外に出ていくようになりました。友達に、「違よ、『いってきます』だよ。似てるけど」と言われると、『いってきます』『いただきます』とA児は不思議そうにしていたましたが、他の友達に「まあ、どっちでもいいよ。行こう」と声を掛けられるとA児も笑顔で友達に付いて行き、滑り台や砂場などで繰り返し遊んでいました。

(★下線は、視点に基づく教師の援助)

新宿区では



新宿区では、**日本語初期指導として母語による個別指導**を行っています。(一人当たり50時間まで)

また、**双方向音声翻訳機を各園に配布**し、必要に応じて子供に指示を出すなど活用しています。各園では、ほめる言葉や良いことを伝える際に使うようにすることや、翻訳機に頼るだけでなく、簡易な日本語で直接話すこともなども大切にしています。

遊び

「遊びから始まるコミュニケーション～同じ遊び～」

韓国籍のC児は、入園当初は日本語を話せませんでした。家庭では母語で話します。

ある日、C児とD児がままごとをしていました。D児がぬいぐるみを抱いて寝かせようとしていたので、教師は段ボール箱がベッドにできることを知らせると、D児は段ボール箱に布団を入れてぬいぐるみを寝かし付けました。その様子を見ていたC児もやりたそうだったので「Cちゃんもやる」と教師が聞くとうなずいたので、布団を渡しました。

C児は、同じようにベッドに寝かせ、D児のぬいぐるみの隣に自分のぬいぐるみを並べました。D児がぬいぐるみにミルクをあげるとC児も同じようにミルクをあげました。

7月、C児は砂場で遊んでいました。カップに砂を入れると教師のところを持ってきました。教師が「おいしそう、これ何だろう」と言うと、C児は「コフィー」と答えました。教師が飲む真似をするとC児は嬉しそうにしていました。その後、他の友達がしていたように三角の型抜きに砂を入れてケーキを作りました。教師がケーキに載せる花を取りに行くと、C児と他の子供も一緒に取りに来て、ケーキの上に花を飾りました。

9月、C児がD児と手をつないでままごとの場に来て、二人でソファに座りました。C児が立つとD児も立ち上がり、C児が鈴を鳴らすとD児も鈴を鳴らしました。D児が「発車」と言うとC児も「発車」と真似て言い、D児が「マスク」と言うとC児も「マスク」と言いました。

しばらくすると、D児が「ただいま」とままごとの場に戻ってきました。それを受け、他の子供たちが「行ってきます」と出掛けていきましたが、C児は戻ってきませんでした。教師は、C児が「ただいま」の挨拶が言えないために、ままごとの場に戻って来られないのではないかと考えて、言い方を伝えましたが、C児は戻ることを嫌がって元の場所に戻ってきませんでした。

10月、D児がプラスチック容器に赤い京花紙を入れて「いちごジュース」と言うとC児も真似て、「いちごジュース」と言いました。D児が京花紙の色を見て「ぶどうジュースもあるよ」と言うと、C児も「ぶどうジュース」と言いました。教師が「いろいろなジュースがあるね」と言うと、C児とD児は、次々にジュースを作っていました。別の友達が茶色の紙を丸めてチョコレートの空き箱に入れると、C児もチョコレートの空き箱を見付けてチョコを作り、次にチーズの空き箱を持ってきて黄色い京花紙を入れました。

遊びの中で、相手の言葉や活動を真似ることでコミュニケーションが生まれ、C児は園生活に溶け込んでいきました。

(★下線は、視点に基づく教師の援助)

新宿区では



新宿区では、**各園にタブレット型パソコンを配布**しています。手元に実物がなく、園児に画像で知らせた方が分かりやすいものを検索して示すなどしています。

また、子供たちが**遊んでいる場面を動画で撮影**し、降園時に迎えに来て待っている保護者に遊んでいる様子が伝わるように動画や写真を撮って、スライドショーで見せるなどしています。

生活

「園生活にとけこむきっかけ～母語の手遊び～」

韓国籍のE児は、園生活の流れが分からず、母親と別れると「オンマ（お母さん）」と呼びながら泣き、不安そうにしていました。遊びだすと少し落ち着きますが、母を思い出しては泣くということを繰り返していました。保護者は日本語での会話ができ、初めは不安にならぬようE児が楽しんでいた様子を交えながら、丁寧に関わるよう心掛けました。

不安そうに過ごすE児は、生活の流れも分からず、友達から一人離れたところで立ち尽くしていることも多くありました。みんなで遊ぶときや集まるときに、教師が誘い掛けてもE児は首を振ってなかなか受け入れようとしません。保育室にある遊具で遊び出しても、しばらくするとまた母語で母親を呼びながら、泣いてその場を離れてしまうこともありました。教師は、その不安を受け止めつつ、毎日諦めず、母語の単語を織り交ぜながら話し掛けることを繰り返し、様子を見守りました。

その後は、保護者にもE児が泣いていた様子を知らせつつも、教師の関わりや楽しんでいた遊びを伝え、保護者が不安にならぬように配慮しました。保護者も、言葉が分からないE児の不安感と初めての集団生活であることに理解を示し、教師を信頼して毎日登園させてくれました。

しばらくすると、E児は遊ぶ時間は泣かずに過ごすようになりましたが、片付けをして降園準備になると、不安になり立ち尽くして動けない姿が見られました。教師が、絵本や紙芝居、手遊びなどに誘い掛けましたが、みんなが集まる場所まで来られませんでした。

そこで、教師がE児の母語で手遊びを行ってみたところ、E児は目を大きく見開き、驚いた表情で教師の顔を見ていました。もう一度、手遊びをしてみせると、離れたところと一緒に手遊びをする姿が見られました。

翌日、E児は片付けの後に、周囲の様子を見ながら降園準備を済ませ、学級のみんなと一緒に教師の近くに集まっていました。そこで、教師は「コムセマリガ ハンジベイッソ…」とE児の目を見ながら手遊びを行いました。E児は笑顔になり、友達と一緒に繰り返しました。降園時に保護者にその話をすると、前日にE児が家で、「先生が自分の知っている歌を歌ってくれた」と言っていたと返答してくれました。保護者は、「ありがとう」と教師に感謝の気持ちを伝えました。

数日後に、『コムセマリ』の手遊びを知っていた年長児が、降園時に一緒に手遊びを行い、E児に母語で話し掛けてくれました。その日を境に、E児は園生活の様々なことを、友達の様子を見ながら一緒にいき、安心して過ごすようになっていきました。

（★下線は、視点に基づく教師の援助）

新宿区では



新宿区では、園便り等、幼稚園の生活や準備物に関わる内容を多言語で翻訳して、保護者に配布しています。委員会が作成した入園説明プレゼンテーションを多言語版で各園へ配布し、活用しています。

他にも、通訳派遣の制度があり、保護者の希望に応じて、保護者会や面談時に同席してもらうことができます。保護者との連携が、子供の園生活を支えています。

多様性

「互いの国への興味～地球儀の活用～」

ネパール国籍のF児は、日本語での表現力や様々な経験が少ないため、友達と一緒に会話を楽しんだり互いの思いを受け止めて遊んだりすることが難しい様子がありました。友達と仲良くすることを求めている一方で、時には、うまく関われない姿も見られました。

9月中旬に、みんなで集まり、学級にある新しい地球儀を見ていた時のことです。

一人の子供が、「これは、何て言う山かな」と地球儀上に描かれた山の絵を見つけて言いました。教師が、「これは、世界で一番高い山なんだよ」と言うと、別の子供が「富士山でしょ」と言いました。「富士山、富士山」と他の子供も口々に言い、教師が「富士山は日本で一番高い山だね、でも世界で一番高い山は富士山ではないんだよ」と言うと、「えー」と声をあげ、子供たちはびっくりしていました。

続けて、教師が「世界で一番高い山はエベレストって言うの。この山はFくんの国にあるんだよ」と話すと、子供たちは「すごいね」と言いながら驚いている様子でした。教師が「この山は、大きいからいろいろな国と国の間にあるの。だから見える国によって呼び名が違うんだって。チベットの人はチョモランマって呼ぶよ。ネパールでは何て言うのかな」と話すと、どの子も興味深そうに聞いていました。F児は、周囲の友達から「Fくん、すごいね」と言われ、満足そうな笑顔を見せていました。

その後、ネパールでは、エベレストが「サガルマータ」と呼ばれていることを教師が調べて知り、それを子供たちへ話題として伝えていきました。

9月下旬になり、再びみんなで集まって、地球儀を見ていました。教師が、外国籍等子供の国を取り上げて、「Gちゃんや、Hちゃんのお母さんの国の中国だよ」と示すと、みんな注目して見ていました。子供たちの中から、「大きいね」という声があがりました。母親がベトナム出身のI児は、普段おとなしくしていることが多いのですが、「Iちゃんのお母さんの国はここだよ。ベトナム、ね、Iちゃん。行ったことあるでしょう？」と教師が話し掛けるとI児は小さくうなずきました。

すると、そばにいた友達が「あ、ベトナムと日本はちょっと形が似ているね」と話しました。確かに、細長い姿が本州に似ています。教師が「本当だ、知らなかった、似ているね」と言うと、I児は嬉しそうな笑顔を見せ、地球儀を眺めていました。

外国籍等幼児の国を取り上げたことが、子供同士のかかわりを生み、互いの国への興味をもたせることができました。

（★下線は、視点に基づく教師の援助）

新宿区では



新宿区には、外国の絵本を積極的に収集している図書館があります。団体貸出を依頼したり、外国語での読み聞かせをするために職員に来園してもらったりすることもできます。

外国の絵本以外にも、日本の絵本が多言語に翻訳されているものもあり、全ての子供が多文化・多言語に触れるきっかけとなっています。

「区立幼稚園入園説明用プレゼンテーションの作成と活用」

入園説明では、幼稚園での生活、入園までに準備する物や日常的な持ち物等、保護者に伝えることがたくさんあります。外国籍等幼児の保護者にとって、これらを聞き取ることは大変なことです。

そこで、新宿区委員会では、区立幼稚園が共通で説明する内容、入園前に必ず伝えておきたいことを洗い出し、情報量の精選をした上でプレゼンテーションを作成しました。

(プレゼンテーションの内容構成)

- ①区立幼稚園の概要（幼稚園教育の目指すもの等）
- ②幼稚園の一日（時程や活動の内容等）
- ③一年間の行事（学期ごとの主な行事）
- ④服装（園帽、バッグ、着てきてはいけないもの等）
- ⑤持ち物（毎日持ってくるもの、園に置いておくもの等）
- ⑥園からのお願い（欠席連絡の仕方、禁止事項等）



説明をなるべく短くし、写真を入れて視覚的にも伝わるように工夫しました。

今回作成したプレゼンテーションは、現在各園に在籍している外国籍等幼児の母語に合わせて、英語・中国語・韓国語・タイ語・ネパール語・タガログ語・ミャンマー語・ベトナム語・スペイン語に翻訳しています。各園が必要に応じてタブレット端末でダウンロードし、入園説明会等で活用しています。実際に活用した園からは、「これまでより保護者に内容が伝わりやすかった」という声がありました。

「タブレット端末や双方向音声翻訳機の活用例」 ～各園の声から～

【タブレット端末の活用例】

- ◆日々の遊びの様子を撮影し、降園時に見ていただけるよう流しています。また、感染症対策のために小グループごとに遊んでいる子供の様子を撮影し、**外国籍等幼児や他の幼児にその活動を見せることで遊びが広がるように働きかける**ことができました。
- ◆感染症対策のため、保護者に行事参観をしてもらうことができなかったため、**タブレット端末で行事の様子を撮影**して 降園時に子供たちを待っているときや保護者会で見ていただきました。子供たちの成長の様子を見て、涙を流して感謝する保護者もいました。

【双方向音声翻訳機の使用の活用例やポイント】

- ◆双方向翻訳機を活用する場合、**まずプラスの言葉掛けから活用することで、「これはうれしいときに使うもの」という印象をもたせたほうが効果的**です。伝えたい説明や注意する場面ばかりで使用すると、外国籍等幼児に“自分にとってマイナスの場面で先生が使うもの”として印象付いてしまい翻訳機を見ただけで避けてしまうこともあるので、**使用場面に気を付けることが重要**です。
- ◆5歳児の発達を考えると、言葉によるやりとりが多くなっていく時期であり、個人差はありますが3、4歳児に比べて活用が有効な場合があります。
- ◆持ち物等について保護者への連絡、保護者間のトラブルの際には、**互いの意図が伝わりやすく、有効**です。